

アフガニスタンのモゴール族

岩村忍

半世紀以上も前にフィランドのラムシュテッド博士が、メルヴの南、アフガニスタン國境に近いクシュクで、アフガニスタンからきた二人の蒙古語を話す蒙古人に會つて、蒙古語の語彙を採集したことはよく知られてゐる。しかしその後このアフガニスタンの蒙古人が一體どこにゐるかということは全然わからなかつた。多くの學者はヒンズークッシュ山脈西部のハザラジャート地方に住むハザラ人と蒙古語を話すモゴール人とを混同して考え、ハザラジャートに今も蒙古語が残存しているように考えていた。實は私も今度のアフガニスタン調査までは、そう考えていたのである。本誌十三の一・二號に載つた田村教授宛の私信にも私は「ハザラ蒙古人」と書いた。モゴールとハザラとの混同は、無理もないのである。ハザラ人が十三世紀の蒙古遠征軍の子孫であるといふことは、バブル帝のメモワール以來信ぜられてゐることだつた。

ところがこんどの旅行中、ヘラト、マイマナ、バグランの附近の三箇所て蒙古語を保存してゐるモゴール族の所在（共にひどい山中）をつきとめることができたが、彼等はことごとくハザラ族とは何の關係もないと主張してゐる。

そこで私は七月一ぱいを費して西部ヒンズー・クッシュ山脈中にハザラ族の村々を訪れて千キロ以上の旅行をした。その結果は、ハザラ族はことごとくペルシャ語を話しており、彼等もまたモゴール族との關係を全面的に否定してゐるということを見出したのである。

もう一つの発見はこのモゴール人の原住地はゴラト地方で、五、六十年以前にその一部が移動したという事實である。ラムシュテッドが會つたのも多分この移動中のモゴール人であつたのではなからうか。

アフガニスタンのモゴール人と蒙古語については、人文科學研究所二十五年記念歐文紀要に私と同行したシユルマン博士と共同で一文を寄稿しておいた。

(一九五四・八・一)